

# 日本とマレーシアにおける国際交流の可能性について

千葉県立袖ヶ浦高等学校 教諭 鶴岡 ひので

## 1. はじめに

平成30年度8月26日(日)から9月1日(土)の7日間、千葉県国際教育交流事業のマレーシア派遣に参加した。袖ヶ浦高校からは男子2名、女子3名の計5名が参加し、1週間とても有意義な時間を過ごすことができた。

この派遣事業について校内募集をしたところ、最初は2学年のみで20名程度の希望者が出た。海外留学に興味を持ち、英語力向上を目指す生徒が多くいることがわかる。校内選考によって派遣が決定した生徒達は、行けなかった生徒の分まで学んでこようという強い意思を持って海外研修に臨んでいた。本校では、台湾やマレーシアの学生の受け入れを過去に行っており、これから日本とマレーシアが国際交流を継続していく上で必要な取組みは何なのか、研修での生徒の様子を参考に考えていきたい。

## 2. マレーシアの文化について

国際交流を行う場合には、必ず事前に相手の国について深く学んでおく必要がある。無知であることにより、相手の国の人を傷つけたり、逆にこちらが危険な目にあったりする可能性が出てしまうからだ。特に、文化の面では相違点が多く見られる。

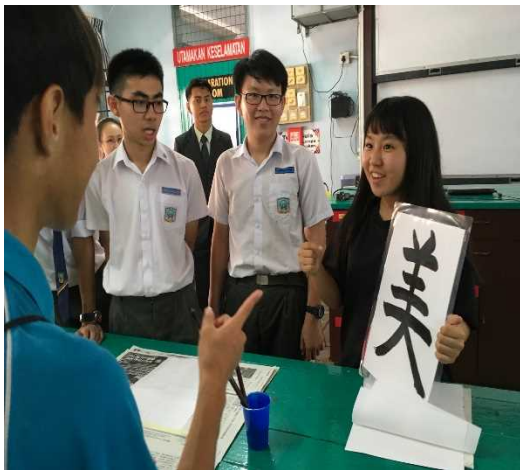
マレーシアは、マレー系、中国系、インド系など様々な民族が暮らしている多民族国家である。そのため宗教も様々であり、ルールやマナーも日本にはなじみのないものも多かった。例えば、イスラム教の女性たちは肌や髪を家族以外に見せてはいけない。私たちもモスクに入るときには肌を隠して入場した。他にも、左手を使うことに注意をするなど、気を付けなければならないことは多々あった。しかし、そのような文化を現地で体験することによって、人種や宗教の違いを受け入れられる心を育むことができたように思う。これらは事前学習があつてからこそであり、国際交流に望む際には、必ずお互いを理解する準備が必要であると考えられる。

## 3. 現地学校交流について

3日目にはSMK SEAFIELD 高校で現地の高校生と交流を行った。生徒一人一人にバディがつき、学校案内や授業を受けた。また生徒達は、各高校に分かれて日本文化についてのプレゼンテーションを行った。袖ヶ浦高校は、マレーシアの高校生に書道を体験してもらうことをテーマとして発表した。生徒達は本番までとても緊張した様子だったが、プレゼンテーションに入ると生徒の表情はとたんに明るくなった。生徒達が自信を持って取り組めたのは、マレーシアの生徒や先生が、私達を温かく受け入れてくれたからである。生徒達は英語が通じなくても、なんとか表情やジェスチャーでコミュニケーションを取ろうと努力

していた様子が見られた。このようなマレーシアの人々の温かさは、異なる人種、宗教がある国の中で、その人たちを受け入れるという姿勢が身についているからとも考えた。

どんな場面でも積極的にコミュニケーションを取る生徒が多かったが、同年齢の現地の高校生と交流する場では、特に話が弾んだようだった。日本語を話せる現地の高校生も多くいて、日本に興味を持つ現地高校生が多かったことも印象に残っている。派遣が終わってから連絡を取り続けている生徒がほとんどであり、短時間でも非常に仲が深まった様子うかがえる。



現地の学校での様子

#### 4. カンポンステイについて

5日目にはバングリス村の各家庭でカンポンステイを体験した。生徒達は2～3名ずつ各家庭に分かれて過ごした。私が過ごした家庭では、ホストファミリーは全員英語を話すことができたので、スムーズにコミュニケーションを取ることができたが、生徒の家庭の中にはマレー語しか使わない家庭も多かったと聞いた。その場合は、ジェスチャーや表情でお互いが思っていることを伝えることができたようだ。また、ムスリムの民族衣装を着せてもらったり、マレーシアの家庭料理を出してもらったりと、観光だけでは見ることのできない人々

の暮らしを体験することができたようだった。

## 5. 国際交流のための ICT

現在袖ヶ浦高校には、普通科に加えて情報コミュニケーション学科という学科が設置されている。情報コミュニケーション学科では、生徒一人一人が iPad を持っていて、それを活用しながら授業を受けている。word や excel でプレゼンテーションをするのはもちろんのこと、様々なアプリケーションを駆使して研究発表などを行っている。今回の派遣事業でも、この学科から 2 名の生徒が参加しており、ネットを通じての国際交流に興味を抱いていた。そして今回、カンボンスティや現地の高校生との連絡を交換し合うツールとして最も多かったのが Instagram や Twitter、LINE などの SNS である。電話番号やメールアドレスで連絡を取り合うよりも、早く簡単にコミュニケーションをとれるからである。このインターネットを使うことで、今回現地に赴くことができなかった生徒も、テレビ電話などの機能で、他国の様子を知ることができる。今後も ICT を利用した国際交流の実現を考えていく必要がある。

## 6. 日系企業視察について

日系企業には、東京海上ライフのクアラルンプール支店を視察させていただいた。そこでは海外で働くためにはどのような力が必要か、ただコミュニケーション力を伸ばすだけでなく、話す内容が大切であるということをお教えいただいた。将来海外で働きたいという生徒達も、非常に参考になった。東京海上ライフのクアラルンプール支店では、日本人スタッフが 2 名しかいない。マレーシアと日本では働き方、人への接し方も違う上で、それをお互いに理解しながら仕事をしていくことが重要になる。ただ、海外で働きたいからという理由だけでなく、その地で自分が何をしたいかを考えなければならない。

## 7. 他高校との交流について

事前学習から本事業に至るまで、他 5 校との交流も非常に有意義なものであった。最初は、緊張感があったものの、ダンス練習や宿泊を重ねるごとに日本人同士のコミュニケーションも活発になっていった様子だった。高校が違っても、互いを理解し仲を深めていくということは、国際交流の場だけではないことで、日本国内においても同じだということがわかった。他の高校の生徒と一緒に行動することで、勉強への取組みや普段の生活面でも影響を受けることが大きかった。帰国してから、始業式で成果発表を行う際にも、生徒は英語で発表したいという気持ちを持つことができた。また英語の発音も普段の日常よりも、意識して会話できるようになったことも、他高校との交流があったからではないかと考える。

## 8. 最後に

今回のマレーシア派遣を通して、国際交流について改めて考えさせられた。私は英語の教員として、本事業で生徒達が英語力を伸ばし、今後の進路の何かのきっかけにしてほしいという思いで参加に至った。しかし生徒が実際に現地に行って体験することは、英語力を向上させるという目的だけではないということだ。自分たちと異なった文化に触れることで、今の自分を多方面から見ることができ、日本の良さも改めて知ることができる。また、たとえ言語の壁があっても、人とコミュニケーションを取ることで自分の世界を広げることができる。今回派遣に参加した5名は全員、海外に行くのが初めての生徒達だった。事前研修や、プレゼンテーションの準備も派遣当日も楽しみに、一生懸命準備する様子を見てきた。私自身も生徒の成長を見ることを楽しみにしていたのだが、その一方で、初めての海外滞在で1週間辛いことも乗り切れるか、英語を嫌いになってしまわないかという心配もあったことは事実である。しかし、生徒達は全員帰国してから、マレーシアでの経験をきっかけに、将来の夢を見つけ、更に勉強に励むようになった。今回は5名の参加だったが、その他の海外派遣事業にも積極的に参加していくことで、将来を担う高校生の育成につながっていくと考える。また、日本からマレーシアへの修学旅行も検討することができる。海外留学を考えていない生徒達にも、異国の文化を知り、世界のグローバル化を感じさせることは非常に重要である。

生徒達は、マレーシア派遣事業での体験を家族や周りの生徒に意気揚々と話している姿が印象的である。実際に自分の目で、世界を体感できたことにより、自分達が日本とマレーシアの架け橋になりたいという思いが強まったようであった。そして私自身も、教員として、このような気持ちを持つ生徒を一人でも増やしていくことが役割であると考えている。私も生徒も改めてそう考えることができたきっかけとなるこの事業に参加させていただいて、感謝の気持ちでいっぱいである。これからも、グローバル人材育成に向けて努めていきたい。

